

明日香村発掘調査報告会

平成10年度

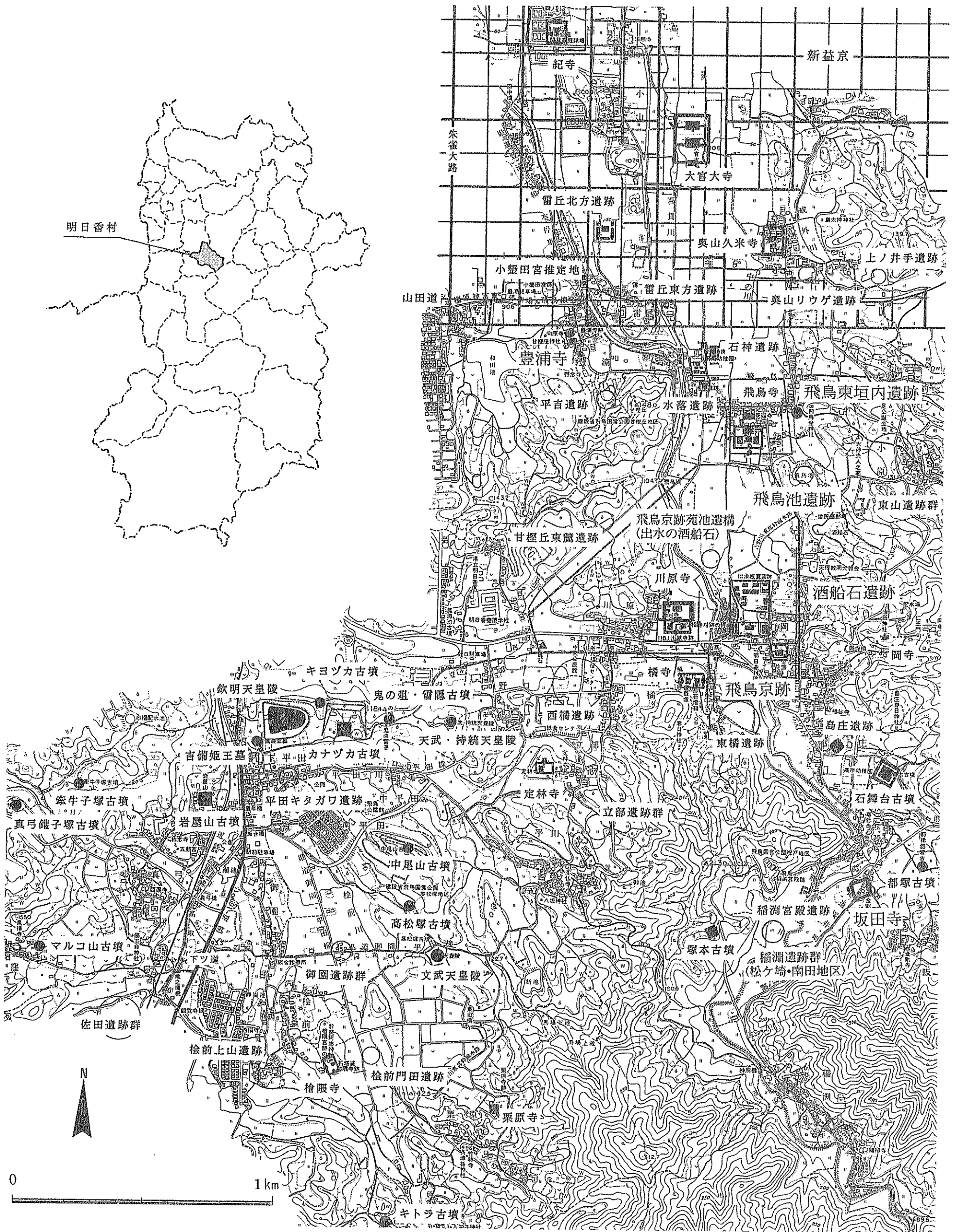


明日香村教育委員会

平成11年11月21日

次 第

受 付	1 : 0 0
開 会	1 : 3 0
開会挨拶	1 : 3 0
調査報告	1 : 3 0 ~ 3 : 1 0
1. 飛鳥東垣内遺跡の調査	1 : 4 0 ~ 2 : 1 0
2. 飛鳥京跡の調査	2 : 1 0 ~ 2 : 4 0
3. 坂田寺跡の調査	2 : 4 0 ~ 3 : 1 0
記念講演	3 : 2 0 ~ 4 : 2 0
『最近の飛鳥京城調査の成果と課題』	
講師 関西大学名誉教授	
明日香村文化財顧問 網干善教氏	
閉会挨拶	4 : 2 0
閉 会	4 : 3 0



明日香村内主要遺跡地図

調 査 報 告

- | | | |
|---------------|------|------|
| 1. 飛鳥東垣内遺跡の調査 | 文化財課 | 西光慎治 |
| 2. 飛鳥京跡の調査 | // | 清岡廣子 |
| 3. 坂田寺跡の調査 | // | 相原嘉之 |

飛鳥東垣内遺跡(1998-24次)調査概要

明日香村教育委員会

調査地 奈良県高市郡明日香村大字飛鳥小字東垣内705-2・706

調査面積 77㎡

調査期間 1999年2月8日～1999年3月10日

調査目的 ポケットパーク整備に伴う事前調査

1. はじめに

今回の調査は、ポケットパーク整備に伴い大字飛鳥705-2・706で行った調査である。調査地は飛鳥坐神社のある低位段丘上を西に下った扇状地性低地に位置している。調査地の西側には、飛鳥寺旧境内が広大な敷地を占めており、西方20mの位置には飛鳥寺東面大垣が推定されている。さらに南方200mの場所には飛鳥時代最大の工房である飛鳥池遺跡が存在している。炉跡や石組井戸、掘立柱建物のほか、金属・ガラス製品、鋳型、多量の木簡、また和同開珎より古いとされる「富本銭」が出土している。これに隣接する酒船石遺跡では丘陵全面にわたって地山を削り出し、版築による盛土が施されている。また標高約130m付近には花崗岩を基礎石として、その上に藤原層群豊田累層(天理の豊田山)の凝灰岩質細粒砂岩切石を積み上げた石垣遺構が3段にわたって巡ることが判明した。これらの遺構は『日本書紀』(以下『書紀』)の斉明天皇2年の条に記載されている「宮の東の山に石を累ねて垣とす」にあたりと想定されている。また飛鳥池東方遺跡では7世紀中頃に遡る南北溝が検出されており、『書紀』の「狂心の渠(たぶれごころのみぞ)との関連が注目される。

これらのことから今回の調査地でも南北溝に関連する遺構の検出が予想された。調査面積は当初8×5mの調査区を設定して行ったが、南北溝の東岸を確認するため一部拡張を行った。よって調査面積は77㎡となった。

2. 周辺の調査

奈文研(1976) 奈良時代以前の幅20m以上の南北溝を検出。東岸には護岸用の玉石。

奈文研(1980) 「木部川」の氾濫による砂層を検出。

奈文研(1983) 幅約5.5m、深さ80cmの南北溝を検出。7世紀末。

奈文研(1984) 「中の川」の河川堆積を検出。

昭辞1990-14次 幅12m以上、深さ60cm以上の南北溝を検出。7世紀末以前。

昭辞1998-13次 流路堆積を検出。7世紀後半。

奈文研(1998) 幅6m～7m、深さ1mの南北溝を検出。7世紀中頃。

3. 検出遺構

今回の調査で検出した遺構は南北方向の溝とこれに伴う護岸遺構、柱穴がある。溝は西岸を護岸改修しながら、3時期の変遷がみえる。

A期 溝幅10m、深さ1.3mの地山を掘り込んだ素掘溝である。7世紀中頃。

B期 溝幅8m、深さ90cmで西岸に杭と石積みで護岸を行っている。7世紀後半。

C期 溝幅6m、深さ60cmで西岸に石積みの護岸を行っている。8世紀前半。

柱穴は溝の東岸にあり掘形は一辺40cmの隅丸方形を呈し、直径20cmの柱根(アカガシ亜属・カシ)が残存している。検出した柱穴は3基あり、柱間寸法は1.8m(6尺)を測る。これらの柱穴は南北塀になる可能性が考えられる。

4. 出土遺物

今回出土した遺物には須恵器・土師器・瓦器・陶磁器・瓦があり、コンテナ約50箱程出土している。遺物の多くは丸・平瓦がほとんどを占め、飛鳥寺式軒瓦や大官大寺式軒平瓦が数点出土している。また須恵器には杯B底部外面に「元寺」「大」と墨書のあるものがある。更に木簡も数点出土しているが文字の判読はできない。

5. まとめ

今回の調査では当初の推定どおりに南北溝を検出することができた。この溝は護岸改修を重ねながら3時期の変遷がみられ、徐々にその幅を狭めていくことがわかる。溝の掘削時期は明確ではないが、A期は7世紀中頃まで遡る。溝は幅10mの人為的なもので飛鳥池東方遺跡で確認されたSD010につながると考えられ、溝の延長は400mにもおよぶ。また奥山久米寺の西方で以前の調査で確認された溝(昭辞1990-24次・奈文研1976)まで含めると約1kmとなる。

溝の性格については藤原宮造営に伴って幅6～7m、深さ2mの建築資材運搬用の運河が掘られている例が確認されており、検出した溝も規模からみて物資運搬用に掘られたと推定できる。また7世紀後半には護岸改修を行っており、その石材の中に酒船石遺跡の石垣で使用されていた砂岩が転用されている。飛鳥池遺跡でも7世紀末の井戸石敷きなどに砂岩が転用されるなど両者の関係が伺える。溝の上流部分では人為的な掘削の痕跡は現状では確認されていないが酒船石遺跡の東麓近くまで伸びていた可能性が高い。この酒船石遺跡では大規模な土地造成事業と石垣遺構が見つかり、『書紀』に記されている「宮の東の山の石垣」にあたりと考えられている。そこで今回の成果について整理すると①溝は幅10m、深さ1.3mの規模である②7世紀中頃まで掘削時期が遡る③溝の総長は最大で1km以上が推定できる④規模からみて灌漑用ではなく、物資の運搬用に掘られたと考えられる⑤溝の上流は酒船石遺跡の東麓まで伸びていた可能性が高いことなどがあげられる。これらのことから酒船石遺跡の石垣工事と一連の事業で掘削されたことが推定され、『書紀』に記されている「狂心渠」の可能性が強まった。この渠は功夫三万余で掘ったと記されており大規模な工事であったことが伺える。またこれまでの調査で斉明紀にある三失政のうち「石垣・狂心渠」が推定できるようになり、今後は「倉庫」の確認が重要な課題となろう。いずれにせよ、今後さらに下流でのルート確認が必要であり、全貌解明に期待がかかる。

付「宮の東山」「狂心渠」関連資料

齊明2年(656)是歳〔日本書紀〕

(前略) 田身嶺に、冠らしむるに周れる垣を以てす。田身は山の名なり。此をば大務と云ふ。復、嶺の上の両つの槻の樹の邊に、觀を起つ。號けて兩槻宮とす。亦是は天宮と曰ふ。時に興事を好む。廻ち水工をして渠穿らしむ。香山の西より、石上山に至る。舟二百隻を以て、石上山の石を載みて、流の順に控引き、宮の東の山に石を累ねて垣とす。時の人謗りて曰はく、「狂心の渠。功夫を損し費すこと、三萬余。垣造る功夫を費し損すこと、七萬余。宮材爛れ、山椒埋れたり」といふ。又、謗りて曰く、「石の山丘を作る。作る隨に自づからに破れなむ」といふ。若しは未だ成らざる時に據りて、此の謗を作せるか。

齊明4年(658)11月壬午(3日)〔日本書紀〕

留守官蘇我赤兄臣、有馬皇子に語りて曰はく、「天皇の治らす政事、三つの失有り。大きに倉庫を起てて、民財を積み聚むること、一つ。長く渠水を穿りて、公糧を損し費すこと、二つ。舟に石を載みて、運び積みて丘にすること、三つ。」といふ。

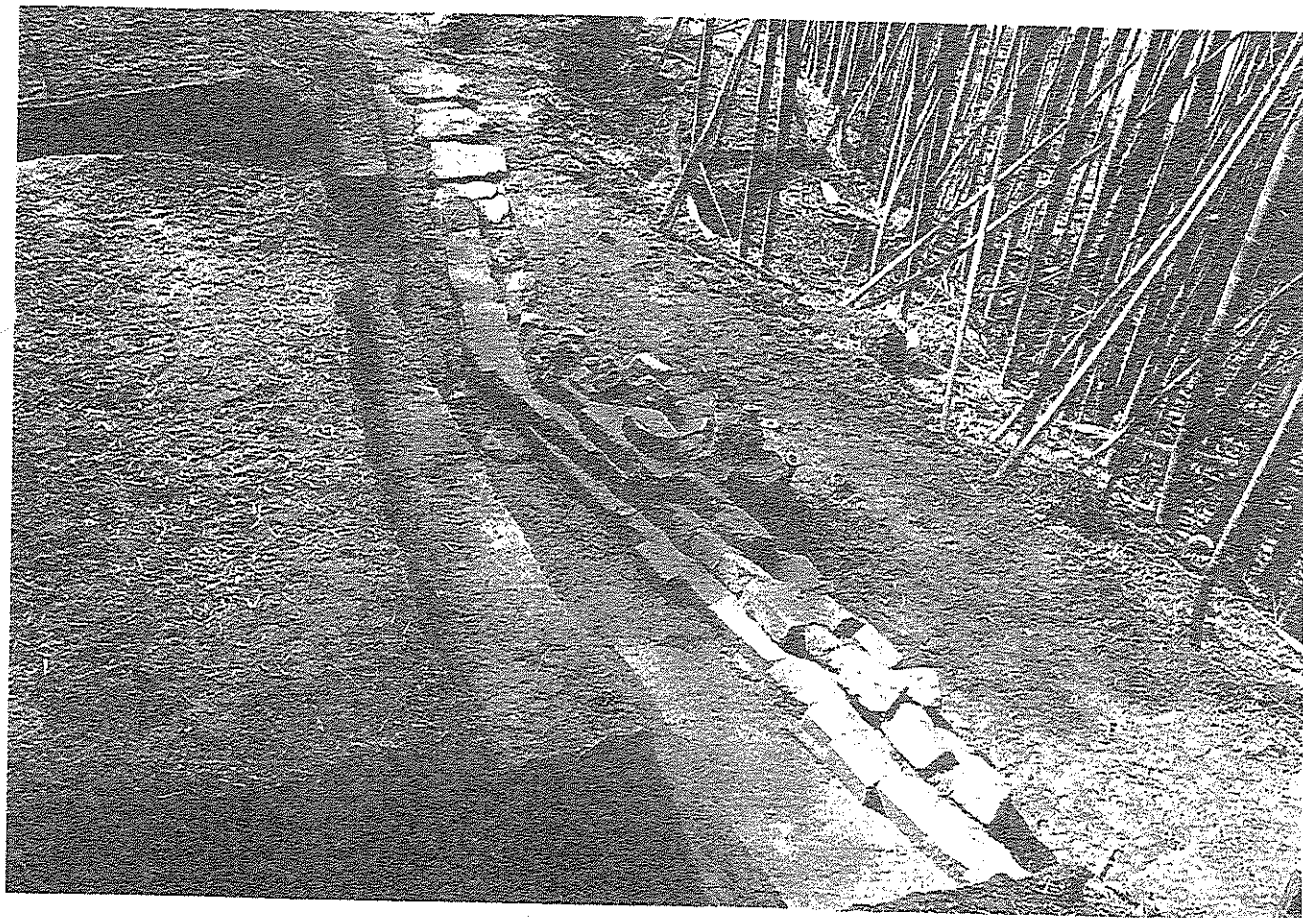
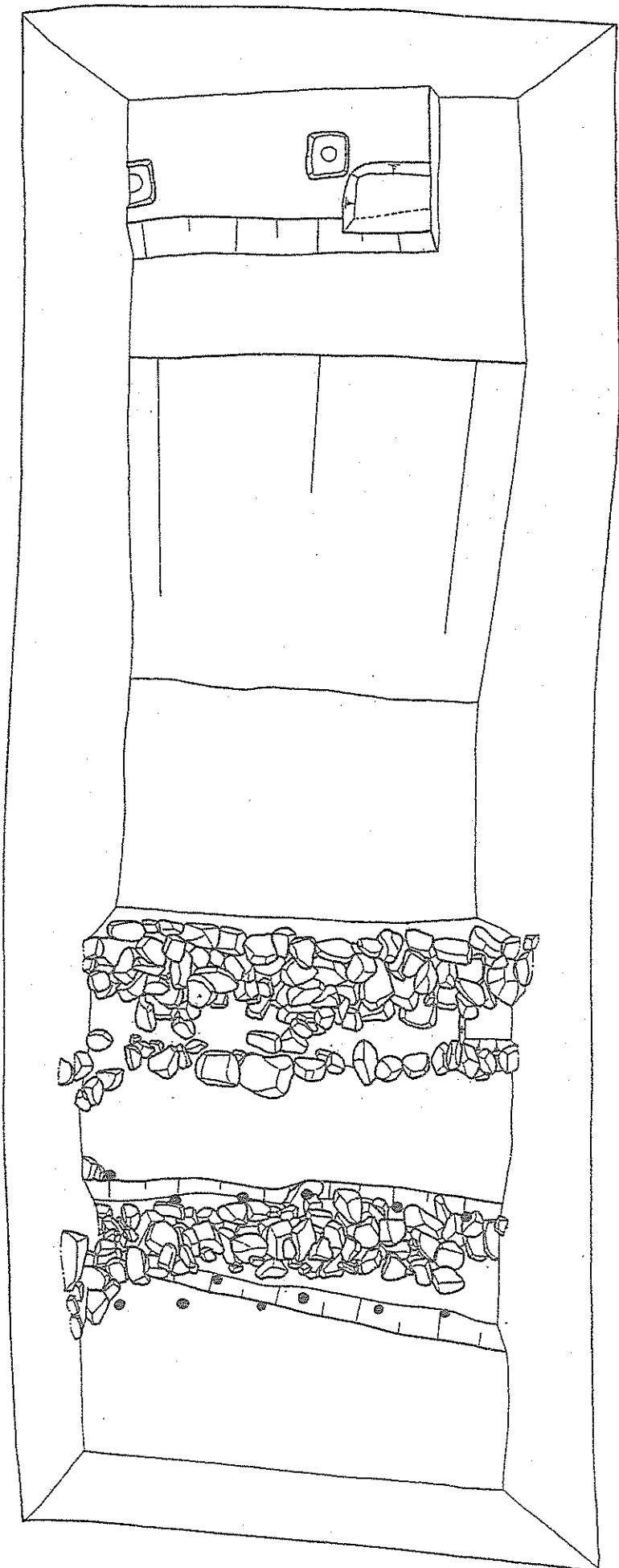
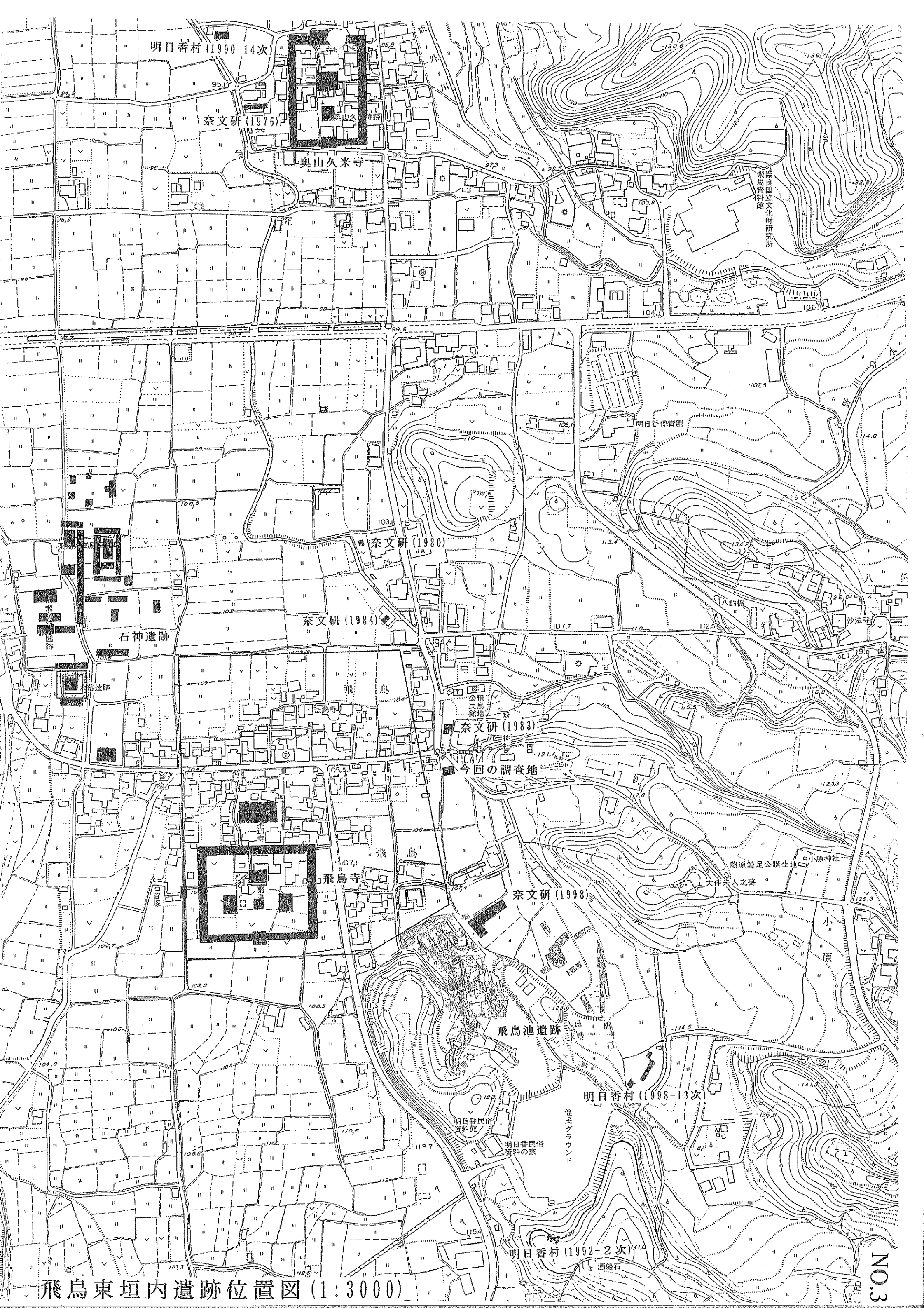


写真1 酒船石遺跡全景(東から)



飛鳥東垣内遺跡遺構図



飛鳥東垣内遺跡位置図 (1:3000)

飛鳥京跡（1998－20次）の調査

1. はじめに

この調査は、旧南都銀行支店の地に犬養万葉記念館を建設するための事前調査として大字岡1150で行った調査である。現在、調査地周辺は「飛鳥京跡」と仮称して、継続的に調査が進められ、2、3時期に重複した宮殿遺構が検出されており、上層遺構は天武天皇の飛鳥浄御原宮と考えられている。調査地はエビノコ郭と東限堀よりも東側にあたり、宮殿の外側に位置している。調査面積は55㎡である。

2. 検出遺構と出土遺物

検出遺構には飛鳥時代の土坑9基があり、ほぼ等間隔で整然と並んだ状況が確認できた。長楕円形を呈し、長径2m、短径約1mで、中央部で約1～1.5m四方状に落ち込み、最深部は約0.5～1mである。出土遺物には、漆を入れていた容器（以下漆壺）、貯蔵用の大甕、漆壺の蓋・栓、漆塊・漆膜等がある。漆壺は200点近く出土し、器種は平瓶・短頸壺・長頸壺とバラエティに富み、遺存状態の良好なものが多くある。中には漆膜が張り付いたもの、固形化した漆液が器内にぎっしりと詰まっているものなどもある。

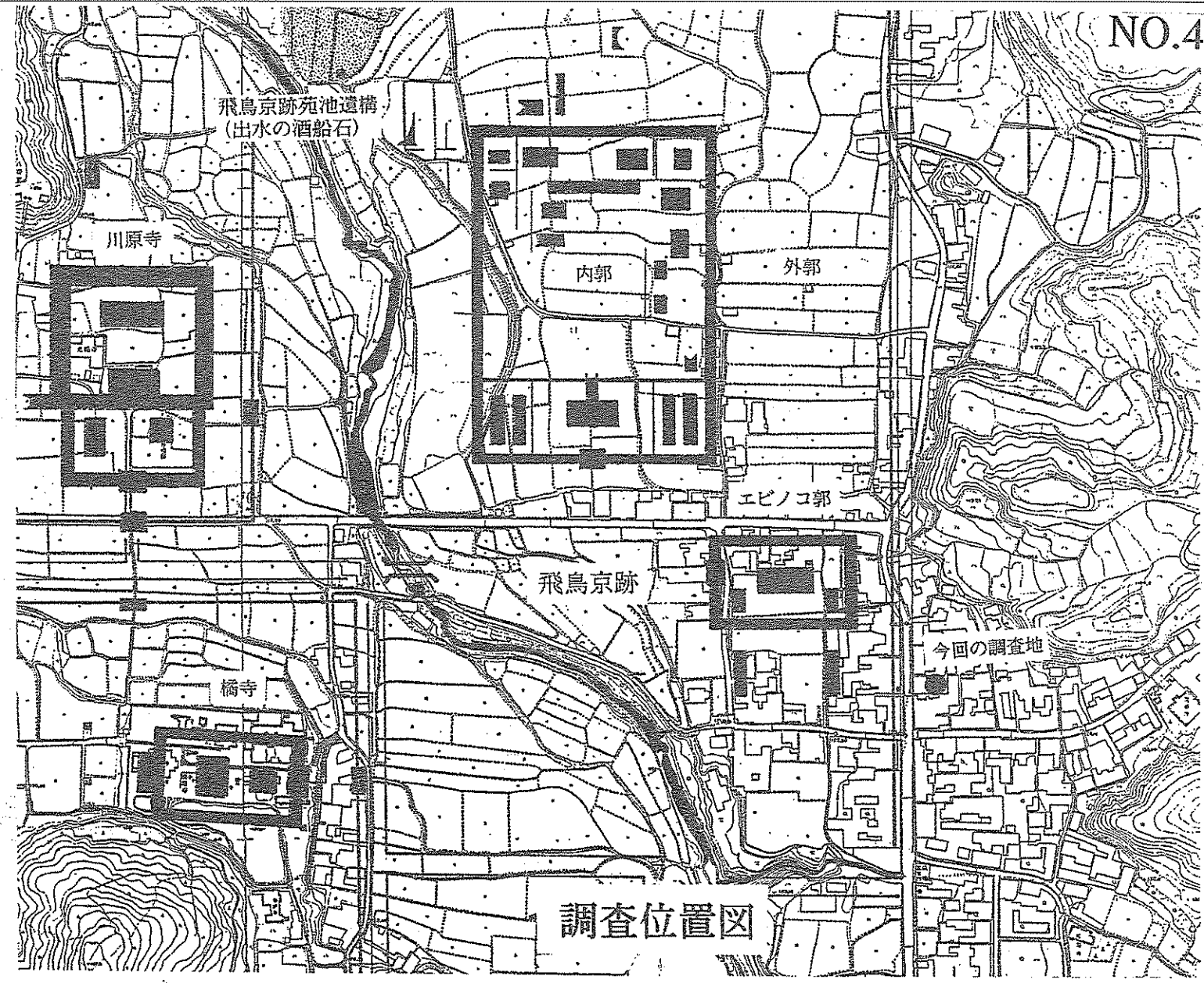
3. まとめ

漆は縄文時代から使用されており、奈良時代には文献や木簡から大変貴重で高価であったことが分かっている。今回の調査では、その漆という特殊な遺物が多量に出土したことが特筆できる。調査地以外の村内で、漆壺が多量に出土した遺跡には、飛鳥池遺跡と紀寺跡があり、工房関連の遺物が伴出している。しかし、調査地では工房との関連をより直接的に示すものではなく、漆壺の使用状態にも違いが認められる。さらに村内発掘調査で一般的に出土する土師器、須恵器が土坑からほとんど出土していない。従って、多量に出土した漆壺は何を示しているのかが問題となろう。

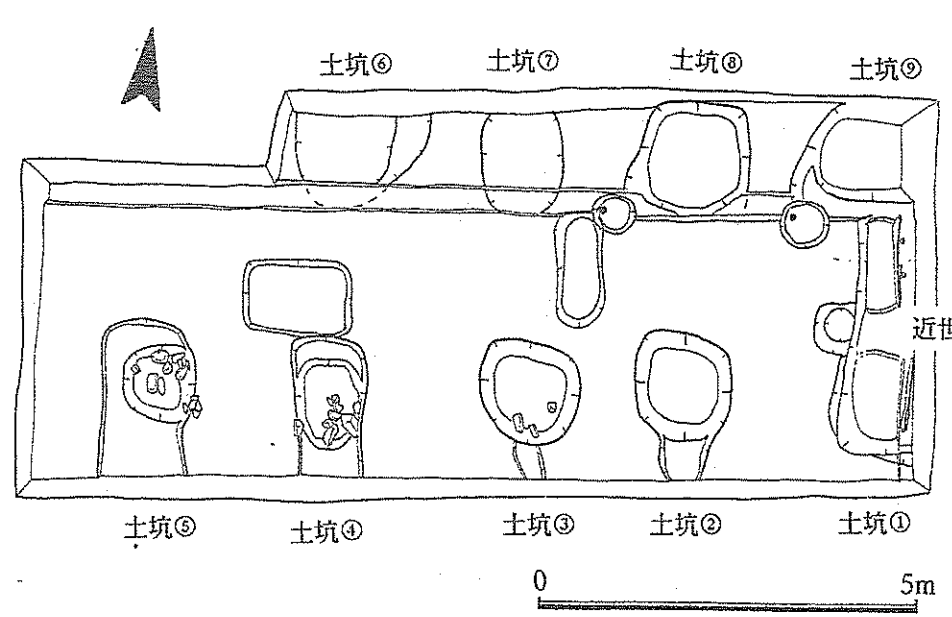
漆壺は国内各地から飛鳥地域に漆液を運ぶための運搬具として使用されている。そのことは、容器の品質よりも中身の漆液が重要であろうことが粗雑な作りの漆壺から理解できること、漆壺には個体差が認められ、様々な地域で作られたことも示唆できること、さらに縄や網籠状の痕跡を残す漆壺があることから裏付けられる。

また、飛鳥池遺跡や紀寺跡では黒漆をきれいに掻き取っていることから、工房での原料の最終的な消費形態を示しているのに対して、調査地で出土した漆塊の状態は透漆、黒漆もあるが不純物の混じった漆が多くあり、漆壺の使用状態に違いがある。少なくともこの調査地では、漆を精製する過程のなかで捉えられるのではないだろうか。漆壺はそのなかで不要になったもの、使用できなくなった漆などと一括され、投棄されたように思われる。

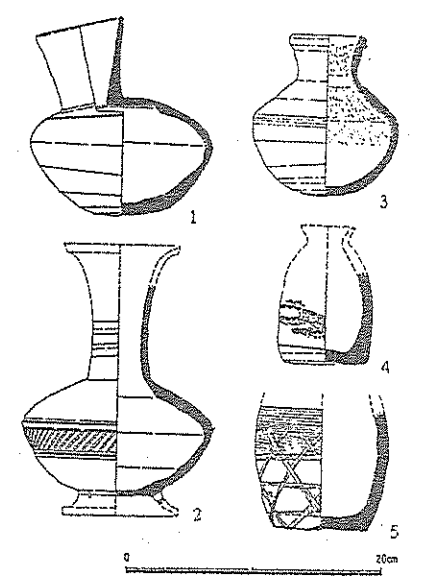
奈良時代には大蔵省に漆部司という漆を管理する機関が置かれていた。もし飛鳥時代にも漆部司のようなものがあったとすれば、今回の調査では直接的にそれを示すものは認められなかったものの、この周辺に飛鳥池遺跡を始めとする飛鳥藤原地域の各漆工房に漆の供給を行い、漆の管理を行った機関・施設があった可能性があるのではないかと考えられる。



調査位置図



調査遺構図



出土土器

(1,2:紀寺跡,
3~5:飛鳥池遺跡)

坂田寺跡（1998-14次）の調査

明日香村教育委員会

調査地 奈良県高市郡明日香村坂田地内
 調査面積 約120㎡
 調査期間 1998年11月4日～1998年12月11日
 調査目的 下水道管理設に伴う事前調査

1. 坂田寺の歴史

坂田寺は『扶桑略記』によると、継体天皇16（522）年に渡来した司馬達止が作った高市郡坂田原の草堂に由来する。一方、『日本書紀』によると、用明天皇2（587）年に鞍作多須奈が天皇のために発願した丈六仏と寺や、推古天皇14（606）年に鞍作鳥（止利仏師）が近江国坂田郡の水田20町をもって建てた金剛寺であるとする記事がある。いずれにせよ、鞍作氏の氏寺として、飛鳥寺と並び最古級の寺院と推測される。この時期の伽藍は未発見であるが、出土土器・瓦から推定される。その後、『日本書紀』朱鳥元（686）年には天武天皇の為の無遮大会を行った五大寺（大官大寺・飛鳥寺・川原寺・豊浦寺・坂田寺）のひとつとしてあげられている。さらに奈良時代になると、『正倉院文書』には坂田寺の信勝尼が天平9（737）年に経典を内裏に進上したことを記す。さらに信勝尼は『東大寺要録』には天平勝寶元（749）年に東大寺大仏殿の東脇侍を献納したと記す。これらの記事と前後する時期の伽藍が、これまでの一連の調査で判明している。次の平安時代以降の坂田寺については明らかではないが、伽藍は10世紀後半に土砂崩れで倒壊している。しかし、延久2（1070）年の『興福寺雑役免坪付帳』によると寺田をもっていたことが記されており、『多武峯略記』には承安2（1172）年には多武峯の末寺になっていたことが記されている。これらについては上方に建つ、現在の金剛寺のことであるのかもしれない。

2. これまでの調査

奈文研 第1次（1972年）・・・飛鳥時代の池、奈良時代の溝、平安時代の井戸を検出。
 奈文研 第2次（1973年）・・・石垣状遺構を検出。北面回廊の痕跡か。
 奈文研 第3次（1980年）・・・奈良時代金堂跡検出。鎮壇具が出土。
 奈文研 第5次（1985年）・・・金堂東方で奈良時代の堂塔を検出。埋納土坑を検出。
 奈文研 第6次（1990年）・・・金堂及び東面回廊を検出。建築部材が出土。
 奈文研 第7次（1991年）・・・南面回廊を検出。回廊南の尾根上に瓦葺建物を推定。
 奈文研 第8次（1992年）・・・伽藍西方で掘立柱建物を確認。
 奈文研1995-1次（1995年）・・・石垣状遺構の延長部を検出。
 奈文研1996-1次（1996年）・・・西面回廊を検出。正門は北側と推定される。
 奈文研第83-9次（1997年）・・・金堂北・東辺を検出。
 明日香村1997-20次（1998年）・・・北面回廊の礎石を検出。

3. 検出遺構

基壇建物A・・・伽藍内の南西部に位置する凝灰岩製切石積基壇を伴う礎石建物。調査では東辺のみを検出したので、基壇規模については明らかではない。また、礎石及び据え付け痕跡も削平のため検出できなかった。基壇は地覆石を据えずに、羽目石（80×50×25cm）を直接たてたものである。羽目石は一箇所だけ立った状態で検出された。基壇東側には幅50cm、深さ10cmの石組雨落溝があり、この溝までの間80cmが犬走りとなり、ここにも拳大の石が敷かれている。基壇の最も残りの良い場所で、犬走りから45cmの高さまで基壇土が残っている。基壇建物AとBの間は全面20cmほどの石を敷きつめている。

基壇建物B・・・伽藍内の中央部に位置する凝灰岩製基壇を伴う礎石建物。調査では東辺と南辺のみを検出したので、基壇規模や平面形については明らかではない。基壇は凝灰岩切石の地覆石（60×40×18cm）の上に羽目石（53×20×25cm）をたて、基壇上端を葛石で押さえたものである。地覆石上面には羽目石を固定するための加工が施されている。また、東南隅にあたる地覆石はL字形に加工してコーナー部分を作っている。羽目石は一箇所だけ、地覆石の上に立った状態で検出された。基壇南側には幅50cm、深さ15cmの石組雨落溝があり、この溝までの間80cmが犬走りとなる。これに対して東側では雨落ち溝は確認できず、幅80cmの犬走りの外に一列の花崗岩石列が並ぶ。この石列の東側は約7mにわたって、細かく割られた瓦片が敷きつめられている。基壇の最も残りの良い所で、犬走りから30cmの高さまで基壇土が残っている。

羽目石の裏側には、前面を加工した花崗岩（45×25×25cm）が一列並んでおり、その構造からみて、古い時期の基壇化粧の可能性もある。

回廊・・・金堂の北側に取り付く、東面回廊。回廊に伴う礎石は一石だけ確認できた。おそらく回廊の内側列隅柱の礎石であろう。礎石は径50～100cmの花崗岩自然石を使ったもので、上面をやや平らにするだけである。回廊西側（内側）には幅90cm、深さ10cmの石組の雨落溝がある。東側（外側）の雨落溝は幅140cm、深さ10cmの素掘溝である。

4. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物の多くは瓦類で、コンテナ50箱以上にのぼる。このうち軒瓦は十数点出土している。その出土位置は、基壇建物A B間と建物Bの北側がほとんどである。このことから少なくとも基壇建物Bは瓦葺であったと考えられる。

5. まとめ

今回の調査では下水道管理設に伴う調査のため、幅1mの狭い範囲ではあったが、奈良時代の坂田寺中心伽藍を対角線上に斜めに横断したことから、回廊に囲まれた内側の様子的一端を探ることができた。ここで今回の調査成果についてまとめておく。

(1) 回廊礎石は、奈良国立文化財研究所第2次調査の石垣や明日香村教育委員会1997-20次の礎石との位置関係から検討すると、回廊北東隅の内側列の礎石と推定される。そこで伽藍を金堂センターで折り返した場合の回廊の位置は北側と南側では対称とはならず、北側の方が2間分（6m）狭いことになる。この差異の原因は明らかではないが、ひとつの要因としては地形的な問題が考えられる。また、回廊隅の検出によって回廊の規模が、東西63m、南北55mとなる。

坂田寺〔金剛寺 坂田尼寺〕
用明二年四月丙午

天皇の瘡轉盛なり。終けたまひなむとする
時に、鞍部多須奈、司馬達等
が子なり。進みて奏して曰
さく、臣、天皇の奉爲に、出家して修道はむ。
又丈文の佛像及び寺を造り奉らむとまうす。
天皇、爲に悲び憫ひたまふ。今南淵の坂田寺
の木の丈六の佛像・挾持の菩薩、是なり。(書
紀)

推古十四年五月戊午

(前略) 即ち大仁の位を賜ふ。因りて近江
國の坂田郡の水田二十町を給ふ。鳥、此の田
を以て、天皇の爲に、金剛寺を作る。是今、
南淵の坂田尼寺と謂ふ。(書紀)

朱鳥元年十二月乙酉

天淳中原瀧真人天皇の奉爲に、無遮大會を
五つの寺、大官・飛鳥・川原・小墾田・豊浦・
坂田に設く。(書紀)

天平十四年(カ)

優婆夷貢進解

讀 法華經一部 音

最勝王經一卷 音

理趣經一卷 音

誦 藥師經一卷 音

(中略)

淨行十年

〔師主坂田寺尼信勝〕

(大日本古文書八一―一三八)

延久二年九月廿日

興福寺大和國雜役免坪付帳

(中略)

一神社佛事諸司要劇田島

(中略)

十六町三段百八十歩 坂田寺田

二段 雲飛庄 十六町百八十歩 南喜殿庄

(中略)

(高市郡雲飛庄) 坂田寺三反 廿七條一里

十一坪

(同郡南喜殿庄) 坂田寺田十六町百八十

廿七條一里五八反小 六一丁一反小

七丁 八二三反 十七丁八反大 十八

一八反小 廿八條一里一丁一反小 二

一丁反小 三十五反半 七丁一丁 十一

一四反 十二一六反大 十三一六反 十

四一四反(下略)。

(平安遺文九一三三三七)

日吉山藥恒法師、法華驗記に云ふ、『延曆

寺僧禪岑記』に云ふ、第廿七代繼体天皇即位

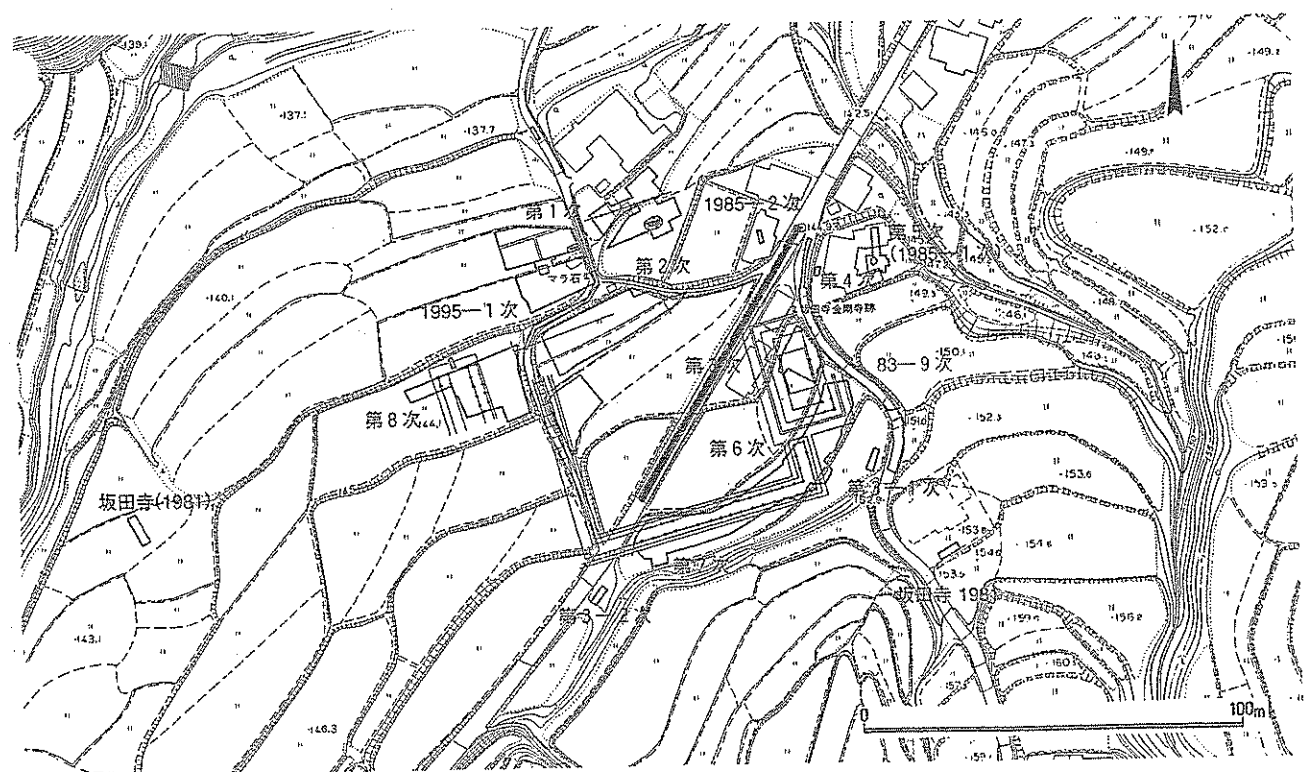
十六年壬寅に、大唐漢人案部村主司馬達止、

此の年春二月入朝し、即ち草堂を大和國高市

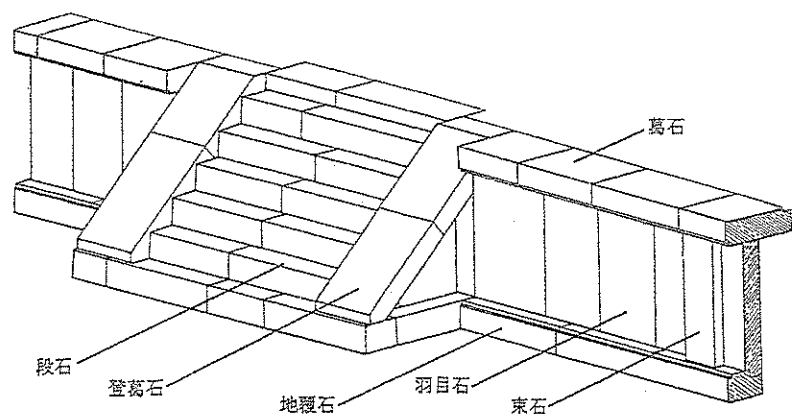
郡坂田原に結び、本尊を安置し、歸依して礼

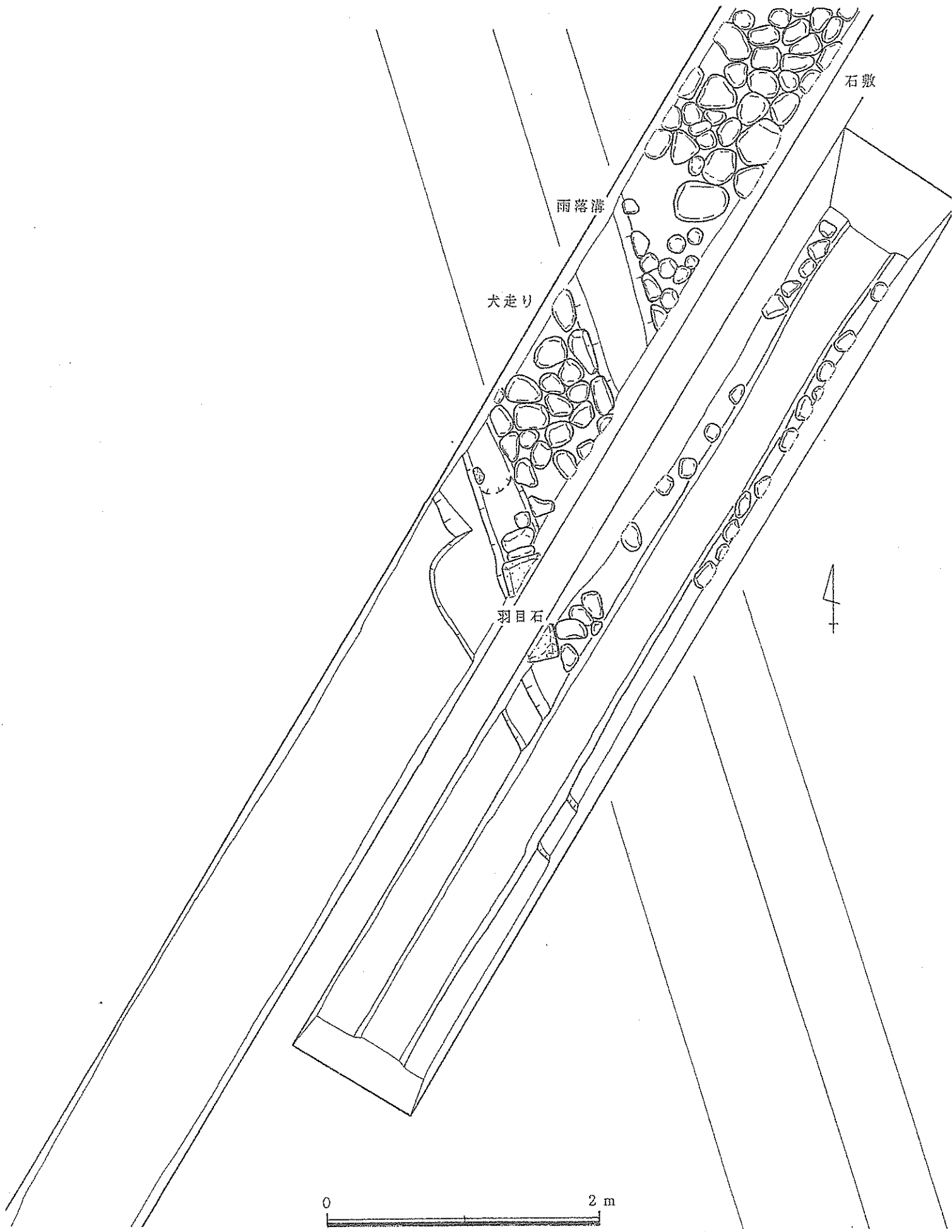
拜す と。(略記)

- (2) 回廊に囲まれた空間には少なくとも2棟の基壇建物があることが判明した。これによつて、坂田寺の伽藍は、回廊の北に取り付く中門をはいと、庭の中央に建物があり、さらに右奥(南西)にも建物がある。また、東面回廊に取り付く金堂が存在し、さらに東に建物が建つという変則的な配置をとる。
- (3) 基壇建物Bは伽藍の中心にあり、坂田寺の中心建物であった可能性が高い。しかし、今回は建物の一部を検出したに留まり、その規模・形態については明らかにではない。また、その性格についても今後の課題である。
- (4) 基壇建物Bは凝灰岩羽目石の裏に花崗岩列があり、前身基壇の化粧石である可能性がある。この推定が正しければ、前身基壇の化粧は、金堂同様に花崗岩による化粧であったのに対して、後身基壇では凝灰岩で化粧する。また、これらの遺構は極めて良好に遺存している

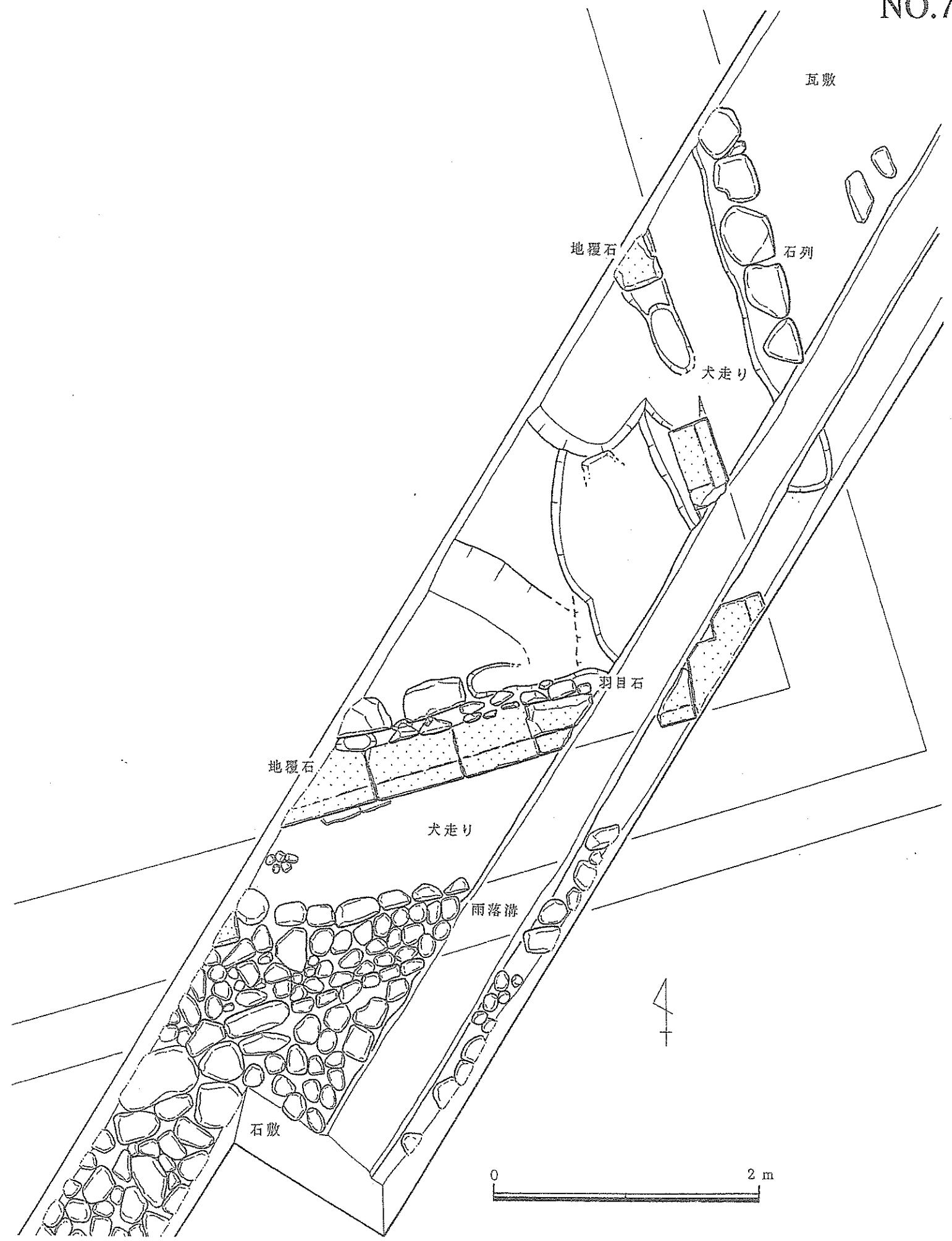


坂田寺調査位置図 1:2000

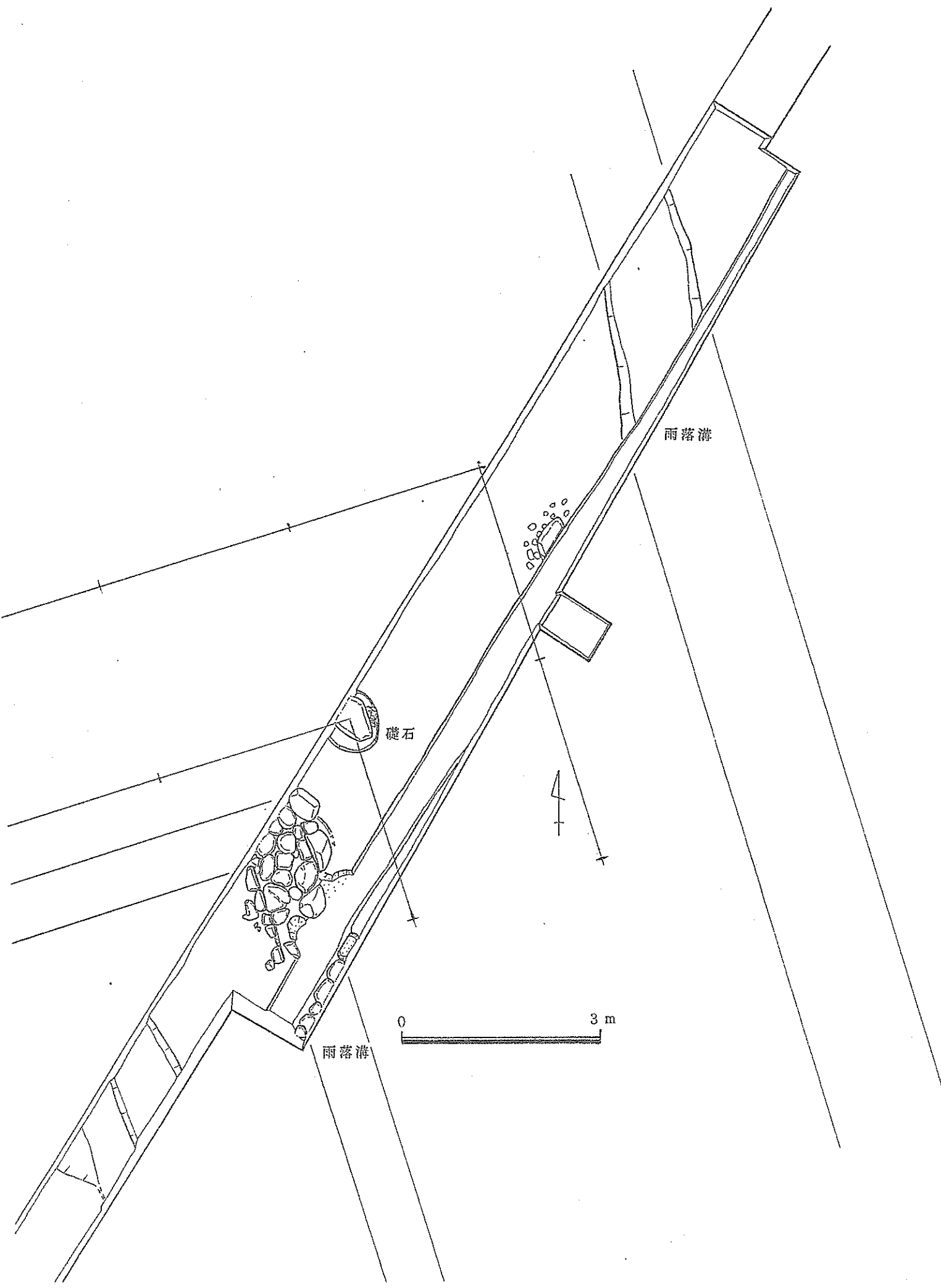




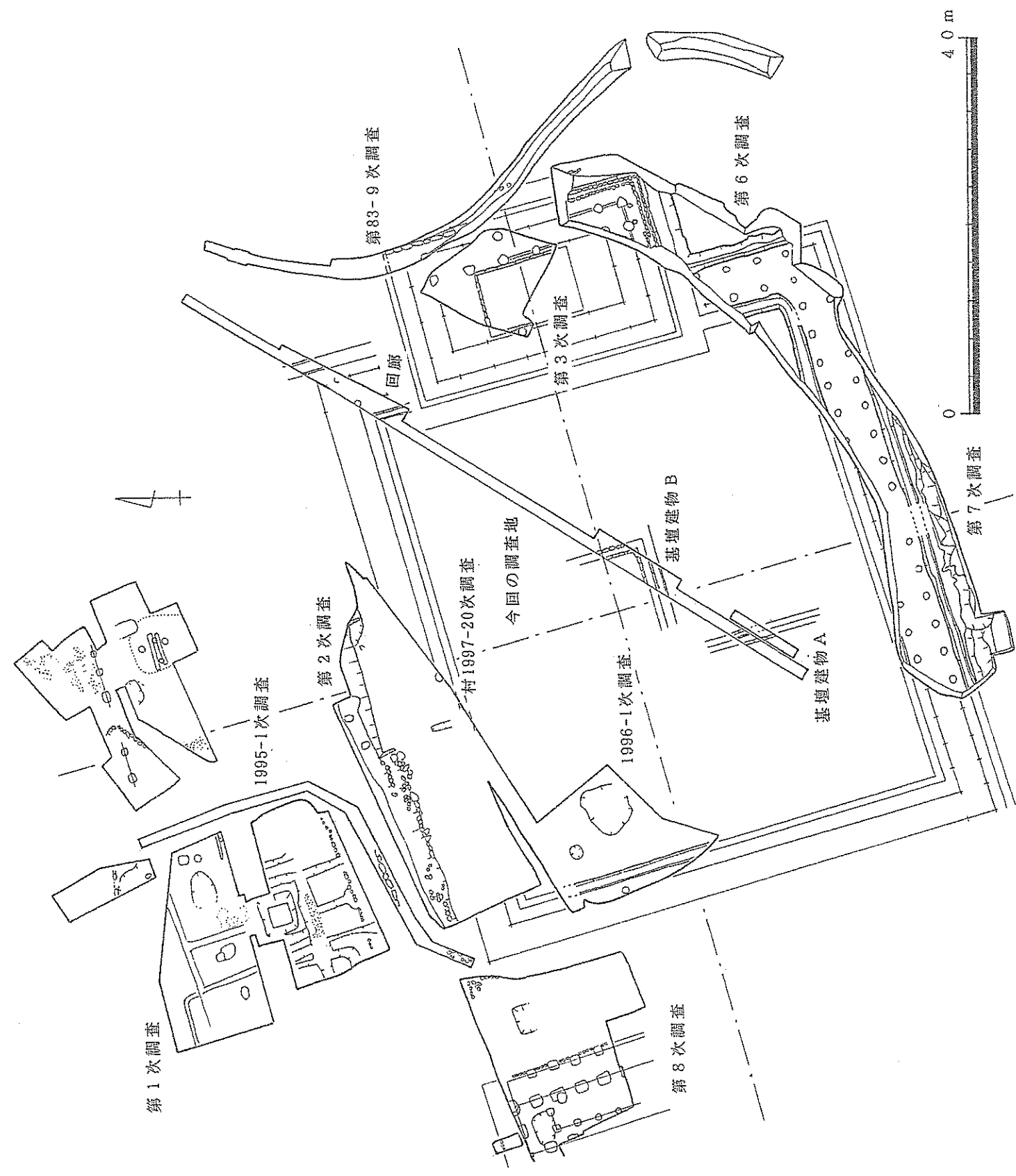
基壇建物 A



基壇建物 B



回廊



坂田寺跡調査位置図

記 念 講 演

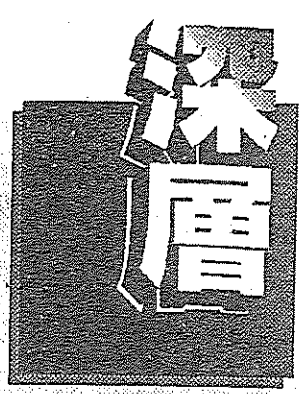
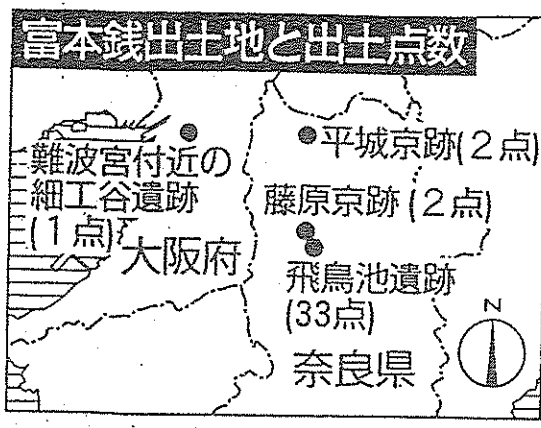
『最近の飛鳥京域調査の成果と課題』

講 師 関西大学名誉教授
明日香村文化財顧問

網 干 善 教 氏

奈良県明日香村の工
房遺跡・飛鳥池遺跡か
ら出土した「富本銭」
について、奈良国立文
化財研究所飛鳥原宮
跡発掘調査部は国内最
古(7世紀後半)の铸造
貨幣と発表した。「和同
開珎が最古の貨幣」と
いうのが日本史の常識
で、富本銭はこれまで
は奈良時代のまじない
用コイン「厭勝銭」と位
置付けられていた。し
かし、奈文研の発表後
も「富本銭＝貨幣」説
を疑問視する学者がい
るのも事実。「厭勝銭」
説も根強い。広く流通
した和同開珎に比べて
富本銭に関する文献上
の記述がないため、
今回の発表で新たな
ぞもクローズアップさ
れている。【大森 顕浩

「富本銭」通貨だったか



各地で出土流通の証拠

肯定派

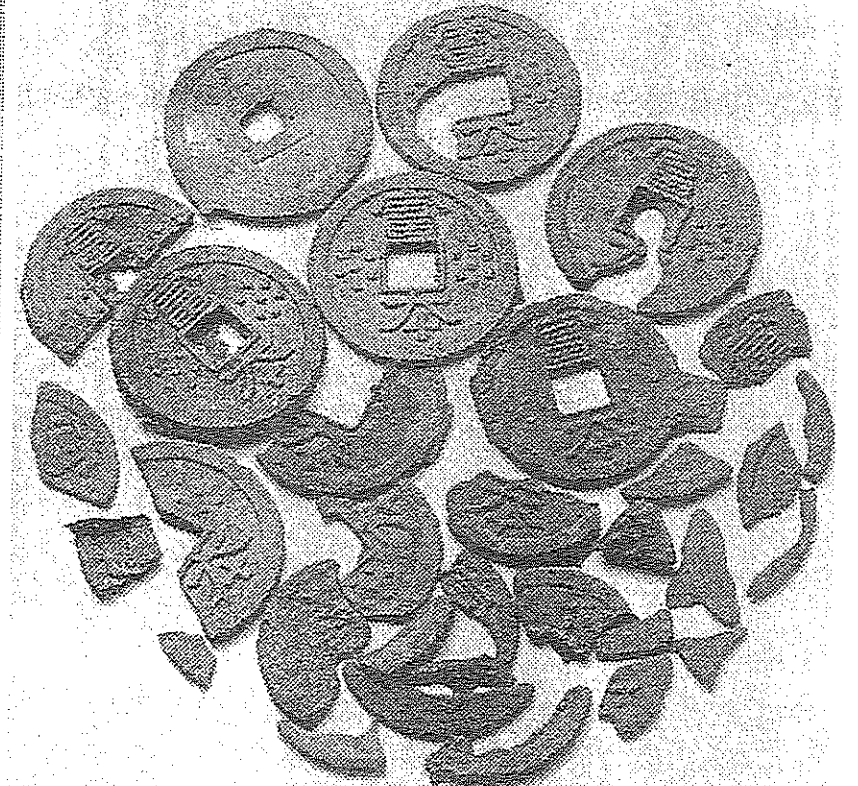
◆二転三転◆
江戸時代、上棟記念や縁起物、がん具、護符、祝賀などの目的で作られた「絵銭」に「富本」の文字が使われているケースもあったため、富本銭もその一種とされていた。ところが、1985年になって同県大和郡山市の平城京跡の井戸から富本銭が見つかったことで、既に奈良時代からあったことが分かった。しかし、

日本書紀などに記述はなく、和同開珎の定説を覆す材料がないため、奈文研は富本銭は中国に例があった厭勝銭と結論付けた。
◆争点◆
今回の出土を受け、奈文研は、和同開珎を最古の貨幣とすれば、それ以前に貨幣をまねた厭勝銭が存在することになり不自然▽富本銭以外に厭勝銭は見当たらない▽藤原京、細工谷遺跡、平城京での出土は流通を意味する——などを根拠に、従来の説を覆して「貨幣」と修正した。

文献記述少なく厭勝銭

否定派

文献記述の少なさを、和同開珎については、米との交換価値を定めた▽土地売買に使われた▽ためた者を役人に登用した▽給与や賞金として支給した——など多様な記述が残る。もっとも、これらの文献も「銅銭」と



飛鳥池遺跡から出土した富本銭33点。国内最古の貨幣とされたが、
—奈良国立文化財研究所提供

古和同「と成分類似

アンチモン5—10%含有

奈文研

明日香村の飛鳥池遺跡で出土した日本最古の貨幣とみられる富本銭の成分中、アンチモンの含有率が、最初期の和同開珎とされる「古和同」の一部とよく似ていることが、奈良国立文化財研究所の二十五日までの分析で明らかになった。
富本銭と同じ材料で最初

期和同開珎が造られたり、富本銭からの切り替えの際に、残っていた材料で和同開珎の製作を始めた可能性も浮上。アンチモンが貨幣製造に不可欠だったため使用をやめたとも考えられ、貨幣制度施行直後の鑄造方法の試行錯誤をうかがわせる。
和同開珎のうち、縁の盛りの際残った枝状の材料に、

「銅銭」が富本銭なら銀銭は?

東野治之・大阪大学教授(日本古代史)も記述の少なさを指摘したうえで「当時の日本が貨幣制度を学んだ唐には貨幣も厭勝銭もあった。日本では厭勝銭が貨幣より先行することがあり得る」と考える。国立歴史民俗博物館の阿部義平教授(考古学)は流通目的説に賛成しつつ「出土例が少ないため、流通目的を否定する人も出るだろう」とみる。

◆富本銭関連年表◆

621年	唐の高祖が開元通宝を铸造
645年	大化の改新
683年	「銅銭を用いよ、銀銭を用いることなかれ」(日本書紀)
694年	「大宅朝臣麻呂らを鑄銭司に拜す」(日本書紀) ▽藤原京遷都
699年	「鑄銭司を置く」(続日本紀)
708年	武蔵国秩父郡から和銅を献上。和銅に改元(1月) ▽和同開珎銀銭鑄造(5月) ▽和同開珎銅銭鑄造(8月)
709年	銀銭禁止
710年	平城京遷都

和同開珎 和銅元(708)年鑄造の貨幣で、銅銭と銀銭がある。奈良平安時代の律令政府が作った12種の「皇朝十二銭」の第1号。モデルは中国・唐の開元通宝とされる。政府は米や布などとの交換レートを設定するなど流通に努めた。これまでに数千枚が見つかっている。

その結果、富本銭は銅が約九〇%、鑄造段階で添加したと推定されるアンチモンが五—一〇%で、この二種がほとんどの「銅・アンチモン型」と判明。
一方、古和同の一部からは、六%程度のアンチモンと硬度が増す一方、鑄型に

しているだけで、「和同開珎」とは記していない。しかし、出土数の多さや、渤海国など海外にまで広がる出土例などから、記述は和同開珎を指すと判断されている。

No. 53

平成11年11月1日

〒635-8530 奈良県大和高田市東中
奈良文化女子短期大学
入試広報課 電話0745-52-0451



飛鳥出水の苑池遺跡

はたして「白錦後苑」か

次回の調査を待つ余裕が欲しい

網干善教

昭和三十四年から始まった飛鳥京跡の発掘調査は奈良県立橿原考古学研究所の担当によって今日まで、すでに約四十年間にわたって継続されてきた。その間には壮大な宮殿の掘立柱群、石敷遺構、石組みの溝、大規模な井戸跡、土器や木簡などの遺物も出土し、その都度、新聞やテレビで大々的に報道され、考古学、古代史研究者はいうに及ばず、一般の方々にも大きな関心を持たれてきた。

この苑池は新羅の雁鴨池を引合いに出しその影響をうけているとか、百済の宮南池との関係で百済の影響があるとか、中国の影響ではなからうかといった意見をはじめ、これが日本書紀の天武天皇十四年十一月六日の条に「白錦後苑に幸す」とあることからこの池はその苑池にあつた池ではなからうかという憶測が述べられている。

しかし、それはあくまでも推測の話であつて実証的な根拠があるわけでもない。それよりも池全体の形も分かっていない。平成十年度の発掘調査は池の中央部を掘っただけで、西側の岸の一部が現れたが、北側の積石も池のどの部分を構成しているかということ

や、東側・南側も判明していない。もちろん範囲や規模も不明である。池の中に小石を積んだ島のようなものが築かれていたからといって新羅に似ているとはいえない。雁鴨池には三つの島があり、高句麗の真珠池には四つの島がある。この飛鳥の苑池ではどうなっているかは今のところ分からない。

さらに最近刊行されたある雑誌の対談では、この池に床を架して七夕の宴を催されたであろうという意見が述べられているが、それがロマンであろうか。

それよりもともこの出水というところで俗に「出水の酒船石」といわれたきた石造物が出土した。それは今から八十三年前の大正五年五月二十一日、土地所有者であった地元の西田新太郎さんが見つけ、六月に掘り出した。その石造物が現在京都東山の碧雲荘

の庭石に移されている。この石がどのように使われていたかということについて、従来、飛鳥京での曲水の宴に使われていた石とか、東四〇メートルのこの丘の上にある酒船石から水を引く導水のための石造物であろうとか得意満面と誇らしげに述べられてきた意見もあつたが、今回の調査によって瞬時に意義を失うということにもなる。出水の苑池の東方約四〇

メートルにあつた旧飛鳥池で万葉ミュージアムの建設の事前調査が行われわが国最古の通貨とされる富本銭が出土し、工事の遂行をめぐって賛否の意見がある。

富本銭を通貨とすることに疑問を抱く人がいる。そもそも通貨というのは流通してはじめて価値がある。それにしては出土例が少なさすぎ、果して通貨といえるかという意見。これが天武紀にみえる銅銭であるとする、天武十二年の詔に銀銭をやめて銅銭にせんとあるから銅銭より古いのは銀銭ということになる。そうすると銅銭である富本銭は最古といえないという意見も起る。

また「フオンセン」といっているが、当時本当にそう読んだのかという疑問、今度の銅銭にみられる七つの点列が、星を表現しているという人もいるが、本当にそうなのか。年代決定の方法にも問題がある等々。

前述の雑誌の記事のなか「学問的に十分な議論もしないうちに、決めつけるようなことをやったらいけない」と発言されている。たかといつた問題などをこ

の機会に明らかにしておくことが大切であろう。これについても曖昧模範な意見が発表されている。面白い発想が如何にもロマンであるかのような錯覚を起させることは、歴史学や考古学にはなじまないところであることを忘れてほしい。

ところで飛鳥京域内にはいくつかの池の遺構が確認されている。しかし今回その遺存が確かめられた出水の池跡は調査途中であるが大規模なものであることは間違いない。但し北側にどの程度広がっているかの判断は次の調査に期待してよい。

かかわりのない人が、先陣を切って憶測を公表し、失笑をうけるのではなく、次の年度の調査結果を待つほどの余裕を望むものである。

富本銭 読み方、年代決定に疑問

富本銭は「富本」と読むのか、「本富」と読むのか、またその年代決定に疑問がある。富本銭は「富本」と読むのか、「本富」と読むのか、またその年代決定に疑問がある。

富本銭は「富本」と読むのか、「本富」と読むのか、またその年代決定に疑問がある。

富本銭は「富本」と読むのか、「本富」と読むのか、またその年代決定に疑問がある。

富本銭は「富本」と読むのか、「本富」と読むのか、またその年代決定に疑問がある。

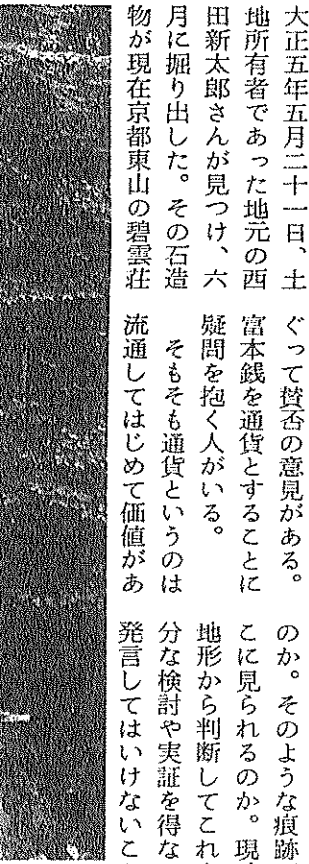
富本銭は「富本」と読むのか、「本富」と読むのか、またその年代決定に疑問がある。

富本銭は「富本」と読むのか、「本富」と読むのか、またその年代決定に疑問がある。

富本銭は「富本」と読むのか、「本富」と読むのか、またその年代決定に疑問がある。



出水の苑池遺構



京都碧雲荘にある出水の石造物



京都碧雲荘にある出水の石造物

「川原寺」とか「岡寺」などと書いた墨書土器がある。かかわりのない人が、先陣を切って憶測を公表し、失笑をうけるのではなく、次の年度の調査結果を待つほどの余裕を望むものである。

「富本」と「七福」

汪 勃

最近、「富本銭」の出土が話題になっているが、この銭面に鑄造された「富本」という文字の意義は何であろうか、両側に七つの点は何を象徴しているのかを、少し検討したいと思う。

ここの「本」という字は、農業のことを指し、「食」のことである。『荀子・天論』にある「強本而節用」の句について、「本、謂=農桑-」、『後漢書・章帝本紀』に記載された「惟先帝憂=人之本-」に「本、謂=稼穡-」、『後漢書・班固列伝』中の「棄=末而反=本」に「本、農也」など、それぞれ類似する注釈がある。「本」は「末」と対照する。「末」は商業のことである。

「富本」の意義は「富民(国)強本」、「富国(民)在于務本」である。「富本」と関係のある記事は、『漢書・食貨志』に、「食足貨通、然後国実民富、而教化也」、「今殿民而帰之農、皆著於本…可以为富安天下」、「民愈勤農…則民大富也」などと、多くの記載がみられる。これらの記事から見ると、「富民」の「本」は農業であるという、その時代の思想が明らかである。「富国、富民の本が貨幣である」との解説とは全く相違する。貨幣の上に「富本」という文字を鑄造したのは、「著于本…為富安天下」(『漢書』、以下特記のないものに関してはすべて漢書からの引用である)の意味を含んで、「富」を追求したければ、「本」を大事にすることを忘れてはいけないとの寓意ではないだろうか。

「富民之本」という句は、中国の史書に記載されている。『漢書・食貨志』に、「(馬援)上書曰、富民之本、在于食貨…」という記載がある。また、『魏書・帝紀第七上』に、「(高祖孝文帝宏)詔曰…勸課農桑、興富民之本」とある。他にも二箇所、馬援という人物の話を用いたものがある。中国の史書にある「食貨志」などからみると、「富本」は両漢時代で最も重視されていたことがわかる。

七世紀末以前に鑄造されたとされる「富本銭」の年代は、上の記事の時代より遅い。「富本銭」の重量、法量は、唐代の「開元通宝」に同じであるが、なぜ前漢の「富本」思想を入れ込

んだのか。確かに、中国漢代の思想文化は初期日本国家の成立に多大な影響を与えたが、何故この時期において、前漢の「富本」思想が必要であったのか。この時期の日本国内にも、前漢早中期に類似するようなことが起こっていたからであろう。

前漢文帝と景帝の時期に起きた重大事件が二つあった。一つは、中央政権下にある各王国は、自ら官吏を任命し、中央政府の命令を無視した上、自国の貨幣を製造していたため、中央政府が権力を集中できず、さらに、皇族の間の権力闘争が激しくなって、「七国之乱」が起こり、国内に戦争が長期間続いた。もう一つは、前漢の「文景之制」に入ってから、「食」生活は前代より豊かになったとともに、農事をする人の多くは商業に熱を入れるようになり、「貨」を追求することに転身した。よって、農業人口は少なくなり、「捨本趨末」という一つの深刻な社会問題となった。これは、農業生産を根本として存在した古代国家にとっては非常に深刻で、解決困難な問題である。「欲国富法立、不可得也。方今之務、莫若使民務農而已」、このような状況に対して、前漢王朝は「重農輕商」の政策をとり、「求末」の農業人口に厳しい処罰を課す法令を出して、「勸農棄商」を行ったが、「務本」には至らなかった。

前漢王朝は叛乱を平定した後、各王国の力を弱め、中央に権力を集中させ、国家を安定・富強させるために、様々な政策を実行した。

漢の文帝の十三年六月に、「詔曰：農、天下之本、務莫大焉…」とし、賈誼は「重本排末」を主題として、「是故明君貴五穀而賤金玉」を進言し、文帝はそれを採納した。

「貨」の使用を制御できれば、「七福」を招くことができる。「富本銭」の両側に点が各七個表がされている。これについても、『漢書・食貨志』の中に関連記事がある。

孝文帝五年、為=錢益多而輕、乃更鑄=四銖錢-、其紋為=半兩-。除=盜鑄錢令-、使=民放鑄-。

賈誼諫曰：法使下天=公得=顧租-鑄=銅錫-為錢-、敢雜以=鉛鐵-。為=它巧-者其罪駭。然鑄=錢之情、非二殺雜為=巧、則不可=得=贏。而殺=之甚微、為=利甚厚。…今農事棄捐、而采=銅者日蕃、釋=其耒耨-治鎔炒炭、姦錢日多、五穀不=為多。善人述而為=姦邪-、愿民陷之=而刑戮-。刑戮將甚不詳。奈何而忽。国知=患=此、吏議必曰=禁=之。禁=之不=得=其術-、其傷必大。令禁=鑄=錢、則錢必重、重則其利深。盜鑄=如雲而起、棄市之罪、又不=足=以禁=矣。姦不=勝數、而法禁數潰、銅使=之然=也。故銅布=于天下-、其為=禍博矣。今博禍可=除、而七福可=致也。何謂=七福-、上收=銅勿=令=布、則民不=鑄=錢、黔罪不=積、一矣。偽錢不=蕃、民不=相疑-、二矣。采=銅鑄作者、反=於耕田-、三矣。銅畢歸=於上、上挾=銅積=以御=輕重-、錢輕則以=術斂=之、重則以=術散=之、貨物必平、四矣。以作=兵器-、以假=貴臣-、多少有=制、用別=貴賤-、五矣。以臨=萬貨-、以調=盈虛-、以收=奇羨-、則官富実而未民困、六矣。制=吾棄財-、以與=匈奴-、逐=争其民-、則敵必壞、七矣。故善為=天下=者、因=禍而為=福、転=敗而為=功。今久退=七福=而行=博禍-、臣誠傷=之。

この「諫」が、実は統一貨幣を鑄造するという献策である。賈誼は、国家を安定させるには、「富本」と統一貨幣、すなわち「食」と「貨」との両者が緊密に関係しているとし、「七福」すなわち「黔罪不積、民不相疑、耕者反於田、貨物平、貴賤別、官富実而未民困、争民壞敵」の追求の重要性を認識していた。しかし、この献策は文帝に採用されなかった。文帝の末には、「半兩盛、錢輕」、「棄農經商」の社会問題は更に深刻化し、景帝の三年春正月、「詔曰：農、天下之本也。黄金珠玉、饑不可食、寒不可衣、以為幣用、不識其始終。…其令郡国務勸農桑、益種樹、可得衣食物。吏初民若取庸采黄金珠玉者、坐臧為盜。」と、厳しい法令が出された。

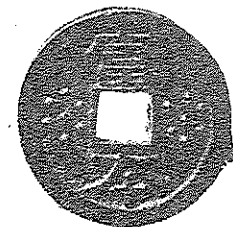
武帝の元狩六年、更に「日有司以幣輕多奸、農傷而未衆、又禁兼併之涂、故改幣以約之…」と詔書を下した。この詔書の内容について、「更去半兩錢、行五銖錢、皮幣、以檢約奸邪」と李奇は注を加え、「末謂工商業」と顔師古は注釈した。このように中央政府の管理下でない貨幣が鑄造されることは、中央集権を推進するにあた

っては、あつてはならないことであるため、「盜鑄金」(貨幣を勝手に鑄造)で、数十万人が処刑され、罪に問われた人数は百数十万人に至った(范文瀾『中国通史』)。このような時代背景に基づき、馬援という人物は、国家を安定させるには貨幣を統一する必要があると、再び認識したので、「改鑄五銖錢」を献策したのである。漢の武帝はこの策を採用し、漢王朝は次第に最盛期に入った。

「富本」と「七福」は漢代の文学者、政論家である賈誼という人物の治国思想を反映している。馬援はその統一貨幣を「五銖錢」として具体化した。「富本銭」の上の七つの点には、「王者之道」などの古代の国家を治める観念が含まれ、「七福」のことを表していると思う。このように理解すると、「富本」と「七福」とが密接に関係し、古代の農業国家における「食」と「貨」の意義も明らかになる。統一国家を治めるためには、「富民之本、在于食貨」、すなわち「富本」と統一貨幣が、国家にとっての重要事項であるとの認識から、よく見える所である貨幣の上に「富本」と「七福」を鑄造して、忘れさせないように、時に之を省みさせることを目的として意匠したのではなかろうか。

また、『日本考』(〔明〕李言恭・郝傑撰、汪向荣・嚴大中校)に、「倭不自鑄、但用中国古錢而已…惟不用永樂、開元二種。」との記載がある。永樂銭は安定した通貨ではなかったため使用されなかったと推測できるが、「開元通宝」が日本で一通貨として用いられなかったのは、日本国内には「開元通宝」とほぼ同型式の「富本銭」があったからではないか。ただし、これによって、「富本銭」が実際に通貨として流通していたという証拠にはならないのであるが。

「富本銭」について、もう二つの謎があると私は思う。一つは、今まで検出された富本銭は、すべて溝から出土したことである。さらに、鑄造精緻の完全な形態を持つ「富本銭」の縁に何故鑄張りが残されたかである。この二つの問題が解決できれば、「富本銭」が通貨とされていたかどうかは、その謎が解けるかもしれない。



奈良県 飛鳥池遺跡 富本銭

大座談会

天武天皇、聖徳太子、皇極天皇、蘇我馬子……
スーパースターたちのドラマが展開

「古代・飛鳥」に日本のルーツを知る

古伏の噴水

上田 出水という地名が、あの地域に残っているのも意味深いですね。

森 出水というのは奈良時代に「いずみ」と読む場合もあるのです。九州では同じ字で「いずみ」と読ませて郡の名になっていますが、水の出る場所なんです。地名も歴史資産で、特に小字名には重要なものが残っていますから、大切にしないと。

あの場所の地理と構造を考えると、どこからか水を引いてきていたんでしようね。たぶん飛鳥川の上流からだと思えます。そして、賓客が来たときなどに噴水を噴かせた。池の後ろには貯水池があると推測しています。その池が大きければ噴水から水が噴き出す時間も長いでしょうし、小さければ手品の水みたいなので五分くらい噴き出して終わりでしょうね。でも、あの導水施設はすごく精密な装置ですね。

森 飛鳥京庭園遺跡と呼んでいる新聞もありましたが、考古学の立場からすれば、飛鳥出水遺跡と呼ぶべきでしょうね。出水という地名にしたがって名前を付けて、それから解釈をすべきです。庭園遺跡では解釈が先になってしまさまな解釈が生まれにくくなってしまっておそれがあります。それはともかく、あそこが庭園であったのは間違いないと思えますね。

【本】 タツ 別字とは
トウ トウ 別字とは
○すすむ(進)おもむく(趣)○
おほひたもつ(銜命)

黒岩 出水よりも少し東の飛鳥池遺跡で、今年の初めに、いわゆる富本銭というものが大量に出土して、新聞などでも「日本最古の貨幣」として話題になりましたね。

森 みんな、フホンセン、フホンセンと呼んでいて、この間は飲み屋の親父にもそう言われましたが、実は、あれを「ふほんせん」と読むかどうかまだわからないでしょう。『日本書紀』などに富本銭と出てくるわけではないんですから。

あれは、「木」に「一」をあわせた「本」という字ではなくて、「大」と「十」をあわせた「本」、トウという字かもしれない。本には、勢いよく進む

といった意味があります。

学問的に十分な議論もしないうちに、決めつけるようなことをやったらいけません。学問の意図め方の面白さが失われてしまいます。今日は、かりに富本銭という言葉を使いますが、本当はそういうことを究明するのが学問なんですよ。

「最古の貨幣」と決めつけるのも問題です。たとえば、弥生時代には、五銖銭や貨泉など中国の貨幣を多く輸入しています。沖繩なんかでは弥生土器と一緒に五銖銭が出るんです。唐時代の開元通宝も沖繩では奈良時代の遺物と一緒に出る。注意がいるのは、開元通宝が京都市内では室町時代の遺跡から出たりする。これは一例ですが、貨幣は場合によっては、新しい時代の土器とそれより古い時代の貨幣が同時に出土することがあって、貨幣だから年代を特定するのは危険なんです。

最古の貨幣といったら中国から輸入していた五銖銭、貨泉はどうなのか。日本で作ったものという意味なら、鉄板を使う練り金(鉄延)というものが、貨幣に進ずるものとして古墳時代によく使われていました。また、江戸時代から知られていたのですが、無文銀銭という貨幣も、各地から出土しています。文字は書いていなくて、目方で量るような貨幣です。

森 大きな博物館では、「奈良時代前期」「奈良時代後期」などと分けて展示物を置いてありますね。そのときの奈良時代前期は実は天智・天武・持統の時代を含むことがあるのです。この重要な時代の位置づけをきわめて曖昧にしてしまっている。

奈良時代というのは、あくまでも平城京に都を移したあとの七一〇年からでしょう。小中学生が見たら混乱するから、やめたらいよいよいつているんですが、なかなか改めません。博物館も美術館も真面目に歴史教育の役割を考えないといかん。蝶ネクタイを締めて、文化人のような顔してるだけじゃダメなんです。

取り返しのつかない発掘

森 ところで、少し専門的かもしれませんが、飛鳥池の発掘には問題を感じているの

です。

遺跡というものは、漠然と土地があるから遺跡というわけではなくて、堅穴式住居の跡なり炉の跡なり、土地に密着した具体的なものが遺っているから遺跡と呼べるんです。考古学でいう「遺構」を取り払ってしまったら、遺跡ではなく「遺跡があった土地」になってしまうんですよ。

僕が見ると、飛鳥池は明らかに掘りすぎです。保存するつもりですが、何を保存するのかが一向に議論されていません。もっと早く、発掘の途中で保存を考えねばならない。出土した遺物についての面白い話ばかりが新聞・テレビを賑わしていた。

僕は昭和二十五年から和泉黄金塚古墳(大阪・和泉市)を掘りました。景初三年の銘のある銅鏡が出た非常に興味深い古墳でしたから、粘土槨をもっと掘りたかった。しかし、遺物を全部、掘り出そうとすると粘土槨が跡形もなくなくなってしまいますから、粘土槨の一部には手をつけずに埋め戻しました。この慎重さが学問の鉄則だと考えています。

考古学を含め、国が学問に直接手を出すのはよくない、というのが僕の持論なんです。

飛鳥池の調査をしている国立の研究所には、スタッフも大勢いると思うのに、内部から遺跡の保存の声がどの段階で出たのか、あるいは出なかったのか。掘りすぎだということば専門家ならわかることですから僕が指摘しておきます。

上田 富本銭を、わが国最古の貨幣とするような報道は間違っていますね。無文銀銭は文様も文字もありませんが、十六カ所から出ているんです。

天武十二年の四月に、「銀銭は用いることなかれ。必ず銅銭を用いよ」と詔が出ています。ということは、それまでは銀銭を用いていたわけですね。天智天皇が創建した崇福寺跡からも無文銀銭が出ていて、天智朝にあったことは間違いないと思います。したがって、わが国最古の貨幣がいわゆる富本銭だというのは誤りで、それ以前に銀銭もあるわけです。

『現代』(講談社)九九・一〇一、折原

大和明日香村岡出水出土石造物の顛末

網 干 善 教

奈良県高市郡明日香村岡出水の地籍で発掘調査を担当する奈良県立橿原考古学研究所は、検出した遺構が飛鳥時代に築造された苑池遺構であると発表し、平成11年6月15日付の新聞はその内容を大々的に報道した。

この遺跡はかつて「出水の酒船石」と称された石造物が出土したところであるが、その石造物が現在、京都市左京区南禅寺下原町37、野村別邸碧雲荘（野村殖産株式会社）が保有し、庭石として転用されていることは周知のことである。そこでこれを機会にその石造物の顛末について整理しておきたい。

まず、平成4年11月1日刊行の野村小枝著『野村得庵と碧雲荘』（野村碧雲会発行）があつてそのなかに次のような記述がある。

又織庵露地の降り蹲踞の笕として使われている石造物に出合ったときだ。これが飛鳥で出土した酒船石なのである。とあり、ついで現在、岡宇酒船1266番地に所在する史跡酒船石について本居宣長の『菅笠日記』を引用して説明している。そして

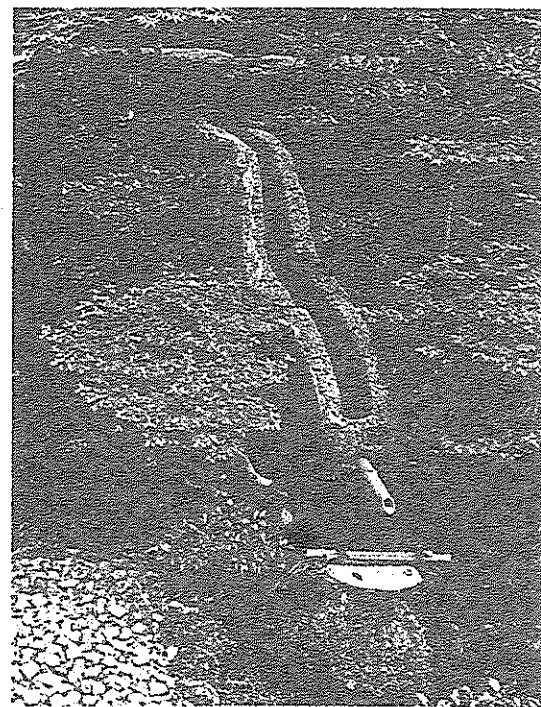
ところが、大正5年5月21日、酒船石から西南約400米余の飛鳥川畔の水田から、酒船石と非常によく似た石造物が2個出土した。水田の所有者が水路に石が出ているのを見つけて取り除こうとしたところ、これがずいぶん大きな石で、掘り進むうちに人工の石造物らしいと判った。

半月がかりで掘り出した石の1つは、長さ2.2米、幅1.7米、高さ75厘の偏平な石で、表面に扇状の窪みが2段に彫ってあつた。この石には台石がついていたが、それは埋戻したようだ。（中略）

今こうした石造物が掘り出されたら大変な話題になるだろうし、埋蔵文化財として個人の自由にはならないが、当時はそうした点が野放しだった。2個の新酒船石は水田の持主から庭師の手に渡って、碧雲荘へ運び込まれたのだった。大正・昭和初期の実業家たちは、庭園内に古い石造美術品を据えることを好ん

だ。従って庭師たちは、絶えずそうした品の入手に気を配っていた。（そして、神戸市灘区に本邸棲宜荘を新築した際、明治20年代に流出した法隆寺若草伽藍跡の塔心礎が移ってきた時の様子、昭和14年10月末にこの心礎を無償で法隆寺へ返還し、それが法隆寺再建非再建論争に一石を投じた経緯を記している）と述べている。ところがこの庭石について

新酒船石が又織庵の路地の笕に使われているのを見た高橋箒庵は「趣向は左る事ながら当荘の如き規模雄大なる茶席の路地に、斯かる衙奇なる細工が調和すべきや、茶人の批評は如何あろう」と否定的な感想を洩らしている。出土したあとの保管がどのようにされていたかは判らないが、大正12年に据えられた当初はかなり目立って、違和感があつたかもしれない。箒庵も石造物趣味では人後に落ちない人で、こまめに古寺や庭師を廻って目ぼしい品を漁っていた。箒庵の口調には、いささかの口惜しさが籠っているかのようなようである。としている。この文を読むと大正12年には出水



京都碧雲荘にある出水出土の石造物

の石造物が碧雲荘の庭園に配されていたことが分かる。ただ大正5年の発掘から12年までの間の様子は分からないが、この記述に間違いがなければ、佐藤小吉編の『飛鳥誌』（昭和19年5月5日、天理時報社発行）に発見の年月が大正15年5月とあるのはミスプリントとなるだろう。なお、昭和3年11月10日の昭和天皇即位の大礼にあたって碧雲荘は久邇宮邦彦王夫妻の宿舎に当てられて、大改修工事を行っている。

つぎに、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館が開催した昭和61年度秋期特別展示の図録『飛鳥の石造物』には、

飛鳥川から張り出した北寄り、出水字ケチングの田圃から、耕作中、大正5年、石塊が現れた。掘出すと2個の花崗岩よりなる、もう一つの酒船石があつた。発見地の隣の字アグイで組立てられた写真が残っている。とある。そこに掲載された2葉の写真は発見直後の大正5年6月に和田千吉編によって刊行された『日本遺跡遺物図譜』第3輯の4枚のうちの2枚である。

また平成2年10月3日～11月23日の間、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館で開催された『日本書紀を掘る』と題する開館15周年記念特別展示の図録に、

1919年（大正7年）（◎1919年は大正8年）飛鳥川の洪水によって、雷丘と甘樞丘の間にある豊浦の集落は大水の被害をこうむる。この時、上流のミロク石の近く、木葉堰東岸、字ケチングの川岸が洗われ、2個の奇石が出土する。出水の酒船石である。隣りの字アグイの田圃で組合わされた後、牛に引かれた石は畝傍駅より、京都東山へ運ばれて行った。偶然出土の時代である。

と記している。ここでは大正7年の水害によってこの石造物が出土したとの見解であるが、明日香村によると、地元で俗に「豊浦流れ」という水害は大正6年8月15日の夜半から翌16日の早朝にかけて起き、家屋18軒が流失したといわれているから石造物はこの水害でなく、前年の大正5年すでに出土していたことになる。

昭和2年12月10日内務省蔵版、『奈良県における指定史蹟第一冊』の報告書には、大正5年5月に偶然発見した。附近には竹片、土器片、木実、靱等も出土したと記している。

さらに、先述の『日本遺跡遺物図譜』の4枚の写真の解説文には次の如き説明がある。

（其一、其二、）此地の所有者西田新太郎氏は、大正5年5月21日右水田の水路に石の一部を発見し、之を取除かんとして、はからず一種の石造物なるを発見し、続いて之を発掘し、6月5日に至り発掘し終りて、十間計り距りたる飛鳥川の堤防の凹所へ移したり。とある。その場所について、

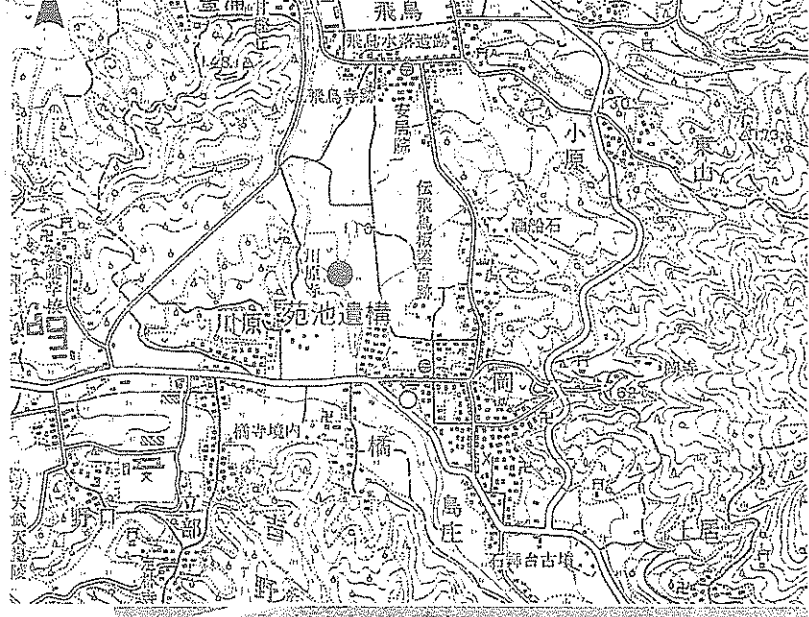
此石造物の後面に標を付するは発掘場所にして、現在の石のある所より約十間計り東南の田の中に当る。そして写真について、

写真は森田常次郎氏監督の下に6月11日撮影したるものにして、以上はすべて発掘調査したる同氏に據れり。とある。森田常次郎氏は橿原市久米町に在住されていた古物商で、戦前かなりの考古資料のコレクションがあつた。

次に其三、其四の説明について、此石に割れ目あるは運搬の際破損せしものなり。森田常次郎氏は原位置に於て試に水を流し見たりしに、甲乙の組合せよろしきため、一滴も外部へ洩れざれしのみならず、上の甲石より乙石へ移りて、長き溝に流れ入りてより、其深きところに一時沈澱し、徐々に下に向て流れる様は甚巧にして、終りの穴は少しく上向き居り、何物か此先に付着なさしむが如き装置なり。石の傍よりは土器片、直径1寸の竹切れ、木の実、稲のもみ、直径約五寸位の丸木を発見したるも、関係あるや否やは明らかならず。とする。

以上の諸記録から出水の石造物の検出、京都への搬出の様子の一部をうかがい知ることができが、まだ十分であるとはいえない。

今回の出水の苑池遺構発掘にかかわる報道によると、この苑池が新羅の雁鴨池と関係があるとか、『天武紀』にみえる「白錦後苑」でなかろうかとかの論議はあるが、それは別として、以前この地より出土した石造物の顛末について記しておきたい。



調査地の位置 (1/25000)



垂直写真 (上が北)



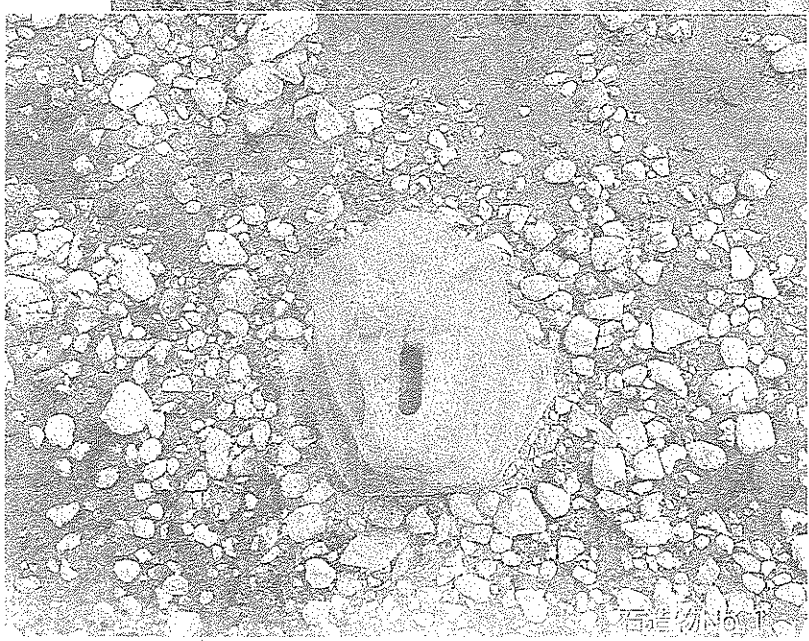
張り出し



西辺護岸



島状石積み



石造物No. 1



石造物No. 2